

<p>速報第3897号 R6.12.11発行 総務課 扱</p>	<p>道議会における質疑・質問及び答弁要旨</p>	<p>6年 文教委員会 12月11日</p>	<p>質問者</p>	<p>広田 まゆみ 委員 民主・道民連合 (札幌市白石区)</p>
<p>質 疑 ・ 質 問</p>		<p>答 弁</p>		<p>担 当 課</p>
<p>一 これからの高校づくりに関する指針について 数年前から、中央政府において、地方創生のために、地域づくりの核となるような「高等学校の機能強化」が、唱えられるようになりました。一方、地方の人口減少の著しい広域分散型の北海道においては、中学校卒業者の減少などに伴い、指針のなかにも書かれておりますが、令和4年4月現在の数字では、すでに55市町村に高校が設置されておらず、96市町村では、1校のみの設置、うち58校は第1学年1学級規模となるなど、従来どおりの中学卒業者を念頭にした考え方では、高等学校の配置自体が危ぶまれる状況になっています。私としては、市町村自治体の皆さんとともに、道立高校の新たな役割を議論の中で、道立高校の機能強化を図っていくことは「待ったなし」の緊急の課題ではないかと考えています。</p> <p>(一) 指針の進捗状況などについて 道教委としても、昨年3月に「これからの高校づくりに関する指針」を「一定の圏域での高校の在り方について地域とともに考える新たな仕組みの構築」など3つの視点で改定され、基本的には、令和8年度以降の配置計画から適用するとの考え方が示されていますが、高校の機能強化のために、現時点で、道教委として、どのようなことに着手してきたのか、また、その成果等について、総括的に伺わせていただきます。</p> <p>(指摘) 現状ではこの圏域協議というのは中卒者が著しく減少見込みの地域を優先的に開催しているように、私としては受け止めていますけれども、入学者が増加したケースがあるということを成果と踏まえれば、今後、むしろですね、入学者が増加をして成果を上げたところにおいても、より精力的にですね、今までの配置計画の地域協議会ではなく、新しいタイプの高校をどう創っていくかという観点から成果を上げた地域においても圏域協議というのを新たな視点で進めていただきたいということをまず指摘しておきたいと思います。</p> <p>(二) 地域とつながる高校づくりについて 1 地学協働による魅力ある高校づくりの推進について 道として、地学協働による魅力ある高校づくりを進めるため、高校生と大人と一緒に地域課題を解決する地域課題探究型の学習体験を推進していると承知をしていますが、広域分散型の北海道においては、必ずしも、地元から通学しているわけでもなく、地域課題の掘り起こしに難しさがあると聞くことがあります。 一方、高校生が地域の食品加工や工芸品などのブランディングに、地域の磨き上げに参画をしたり、YouTubeやSNSの発信を行ったり、あるいは英語による地域資源の観光ガイドに取り組むなど、高校生ならではの視点や強みを活かした活動も見受けられます。その現場には、学校側の努力だけではなく、地域の大人たちのあり方が試されているように思います。 道教委として、地学協働まちづくり事業「北海道MA+CHプロジェクト」として、道内14管内の道立高校からそれぞれ1か所選定</p>		<p>(指導担当局長) 高校の機能強化に向けた取組についてであります。 「これからの高校づくりに関する指針」の見直しにおいては、修学機会の確保や地域創生の観点に立った教育機能の維持などを検討するため3つの視点を設けたところであり、これに基づき、圏域内の高校が担う役割や配置の在り方等について、地域と連携して協議を行う「圏域協議」、生徒や地域の実情を踏まえた特色化・魅力化を図るために設置する「普通科新学科」、地域連携校が高校の特色化・魅力化に取り組む「集中取組期間」などの取組を進めてきています。 こうした取組の成果としては、「圏域協議」では、令和5年度に4圏域、6年度に1圏域を設定して協議を実施し、また、「普通科新学科」については、令和6年度に釧路湖陵高校と大樹高校に設置したほか、7年度に岩見沢東高校に設置する予定であり、「集中取組期間」については、学校や地域が連携・協力して魅力化に努め、入学者が増加したケースがあったところです。</p> <p>(社会教育課長) 「北海道 MA+CH プロジェクト」についてであります。 「北海道 CLASS プロジェクト」では、高校生の地域への愛着や貢献意識、自己肯定感の高まりなどの成果が見られた一方、コーディネート機能の確保など、学校と地域の連携や協働に係る体制づくりが課題となっていたところでございます。 このため、今年度から全道の14の指定校に地学協働コーディネーターを配置するとともに、地域の多様な方々で構成するコンソーシアムを設置し、地域と学校の連携・協働体制を強化しながら、地域と学校がともに学ぶ取組を通して、地域課題に主体的に向き合う人材を育成することを目的に、「北海道 MA+CH プロジェクト」を実施しているところであり、各指定校において、例えば、</p>		<p>高校教育課</p> <p>社会教育課</p>

質 疑 ・ 質 問	答 弁	担 当 課
<p>し、地域と協働した多様な活動を支援をしているということは承知をしておりますが、過去3年でもですね、「北海道CLASSプロジェクト」というのを取り組まれていたと思います。この今までやっていた「北海道CLASSプロジェクト」の成果と課題を踏まえて、今回の新たな事業の目的というのはどのように設定されているのか、改めて伺うとともに、現在の取組状況及び事例などについて伺います。</p> <p>2 地域協働コーディネーターについて</p> <p>従前の「北海道CLASSプロジェクト」との違いは、この地学協働コーディネーターの配置にあるというふうに私としては御答弁を受け止めました。</p> <p>であるならばですね、この地学協働コーディネーターに求められる役割などについて伺うとともに、現在の配置状況や、これからの課題、今後の取組などについて伺います。</p> <p>(意見)</p> <p>地域の現場では、結構地域おこし協力隊の活用などもあると承知をしています。私は従前からですね、知事公約である地域おこし協力隊の支援に関して、広域自治体の道としての政策的な視点が不足していると、一般質問などでも指摘をしてきたわけですが、私はこの地学協働コーディネーターなど、教育や学習の支援人材が、質・量とも手厚い配置になることが、重点課題となるように、関係部との連携を図るよう、道教委に対しても強く求めておきたいと思っております。</p>	<p>町や大学、民間企業と協力して、町の公式デジタルマップを作成するなど、指定校独自の地学協働の取組を進めております。</p> <p>(社会教育課長)</p> <p>地学協働コーディネーターについてであります。地学協働コーディネーターは、学校の求める外部人材の紹介や連絡調整などを行い、学習活動の充実に取り組むとともに、持続可能な地学協働体制構築に向け、地域と学校の橋渡し役としての役割を担っていただくこととしており、円滑な業務推進のため、地域の資源をよく知り、教育活動に理解のある方に委嘱しております。</p> <p>現在、全ての指定校にコーディネーターが配置されておりますが、今後の全道への普及に向けましては、コーディネーター等の人材確保や資質向上が必要であると認識しておりますことから、道教委としては、「北海道MA+CHプロジェクト」の取組を全道に広く広報するほか、コーディネーターの育成に向け、研修を実施するなど、市町村教育委員会と連携し、地域の人材育成を進め、地域と学校の連携・協働体制の強化に向けて取り組んでまいります。</p>	<p>社会教育課</p>
<p>3 関係機関との連携について</p> <p>高校における教育課程の充実を図るため、キャリア教育の観点から、道内外の大学等との連携も視野に入れるべきと考えますが、道立高校における取組状況について伺います。</p>	<p>(高校教育課長)</p> <p>大学等との連携についてでございますが、高校におきましては、生徒が学ぶことと、自己のキャリア形成の方向性を関連付けて、社会的・職業的自立に向けて必要な資質・能力を身に付けることが求められており、そのための取組といたしまして、道教委では、道内の大学と連携協定を締結し、医育大学と連携して実施する高校生メディカル講座、教員養成課程をもつ大学と連携して実施する草の根教育実習や教育機関へのインターンシップなどの取組を実施しております。</p> <p>また、道教委では、令和4年度に開始しました「S-TEAM教育推進事業」の中で、教職課程を有する道外の大学と連携し、オンラインを活用して、生徒が直接、大学教授から指導を受け、探究学習を充実させる取組を行うなどしており、こうした取組を通じまして、生徒自身が、自己の在り方・生き方と関連した課題を自ら発見、解決することができるよう、生徒の自己実現に向けたキャリア教育の充実に努めているところでございます。</p>	<p>高校教育課</p>
<p>(再質問)</p> <p>今の御答弁を伺いますと、道教委としての大学との連携というところでいきますと、教員養成とか、教職課程を有する道内外大学との連携が主であるという受け止めにさせていただきました。私としては、もっと広い分野の大学との連携が、探究型の学習の先に必要だと考えますが、教員養成課程をもつ大学との連携を重視する、現状での意図について伺っておきたいと思っております。</p>	<p>(高校教育課長)</p> <p>教員養成課程をもつ大学との連携についてでございますが、道教委と大学との間におきましては、主に、教員の資質向上、教員養成、教職の魅力向上、へき地・小規模校教育、国際交流・国際理解教育などについて連携協力することにより、本道教育の充実、発展に寄与することを目的としております。</p>	<p>高校教育課</p>

質 疑 ・ 質 問	答 弁	担 当 課
<p>(指摘)</p> <p>教職を希望する方も少なくなっていることも大きな課題なので、これはこれでとても重要な取組だというふうに思いますが、私としてはもう少し違った観点から、道立高校と、大学との連携を考えていただきたいと思っています。御答弁の中にも触れられましたけれども、キャリア教育とは、文科省の定義を私も改めてさらってみました、社会的職業的自立に必要な、基盤となる能力や態度の育成を通して、自分らしい生き方の実現を促す教育である、と私は認識をしております。探究型の学習の先に、学びの意欲を、人生100年時代なので、生涯を通じ高めるためにも、大学の研究者や、ゼミなどの情報にも触れる機会やツールを道教委として提供する役割も果たすべきではないかと考えます。例えばですね、札幌近郊の大学生の方たちと話をした時に、親ではない大人や地域とのリアルな触れ合いのニーズが大変あるということも伺っております。一方で地方に住む子どもたちは、大学や大学生の存在や、キャンパスライフだとかそういう情報に、リアルに触れ合う機会が圧倒的に少ないという課題も、地方の現場では伺いました。地域の道立高校が、子どもたちに、地元の子どもたちに選ばれ続けるためにも、幅広い大学との連携や情報を得る仕組みを、道教委として道立高校の現場を支援するというのも、私は必要だと思いますので、検討を指摘したいと思います。</p> <p>4 国際バカロレアなど世界の大学につながる高校教育について</p> <p>今ほど、国内の大学との連携について伺いましたが、真の意味で、道立高校をこれからの北海道づくりの核にしようとするならば、一つの選択として、地方の道立高校において、国際バカロレア認定校を目指すことも必要ではないでしょうか。北海道においては、公立、私立それぞれ高校としては1校ずつあると承知をしていますが、そして、私どものこの文教委員会も、広島県にある寄宿制のバカロレア認定校を、視察としておじゃまをさせていただいたこともあります。</p> <p>さまざまな人材確保や設備面など基準も費用も大きいとは聞いておりますが、道教委としてこれまで検討をしたことがあるのであれば、その検討状況などについて伺います。</p> <p>また、札幌市内などにおいても、国際バカロレアなどの取組については、結果としてですね、優秀な人を道外、海外へ送り出してしまう教育であるのではないかとのご意見をいただくこともあります。私としてはむしろ世界から人材を呼び込み、選ばれ続ける道立高校であるためには海外の大学との連携が、国内だけでなく重要と考えますが、その必要性についての道教委の認識を伺います。</p> <p>(指摘)</p> <p>今の御答弁にありましたように、カリキュラム編成上の課題などについては、人事政策も含めて、大人側の努力で解決できることだというふうに思いますし、もちろん、この費用というのは莫大ではあるんですけど、今、ラピダス含めて半導体の優秀な人材を海外からどんどん招へいしようという時に、国際基準の大学を受けられない高校ばかりが道にあるという、ばかり、というところとちょっとあれなんですけど、それは非常にマイナスだと思いますので、財源の措置も含めて、幅広い観点からですね、今一度検討する必要があるということで、指摘をさせていただきたいというふうに思います。また、道立高校で独自に海外研修プログラムなどを作成して、留学、短期留学をしているところもあります。そういった意味でも、北海道の国際交流の姉妹都市連携等も活用してですね、そういった海外の方に研修をするような、道立高校を後押しするような取組もですね、体系的に整備を検討いただきたく、これも指摘とさせていただきます。</p>	<p>(高校教育課長)</p> <p>海外の大学との連携などについてでございますが、道教委では、平成26年度に、国際バカロレアの導入につきまして検討する委員会を庁内に設置し、他都府県の検討状況などを調査するなどいたしまして、導入に係る課題の整理や解決方法について検討を行ってきたところでございます。道立高校などでの導入に当たりましては、カリキュラム編成上の課題や、認定に必要な費用負担の問題もありますことから、具体的な対応につきましては、さらなる検討が必要と考えております。</p> <p>また、一部の道立高校では、学校独自に海外研修プログラムを作成し、生徒が海外の大学を訪問するなどいたしまして、異文化理解を深めている事例があり、こうした取組は、将来、国際的に活躍する生徒の育成に向けて、意義のあるものと考えております。</p>	<p>高校教育課</p>

質 疑 ・ 質 問	答 弁	担 当 課
<p>5 将来を見据えた高校づくりを地域とともに考えるしくみの構築について</p> <p>将来を見据えた高校づくりを地域とともに考えるしくみの構築についてということで、伺っていきたいと思います。新たな指針の改定においても、高校に求められる機能や役割、高校教育の目的や目標などを考慮すると、平成30年の指針における1学年4～8学級が望ましいという考え方が、踏襲されているものと承知をしていますが、一方で、小規模校には、小規模校ならではの特色を出しながら先ほども答弁あったかと思いますが、努力をしているものと認識をしております。</p> <p>ただ一方で、大変残念に思うことの1つに、道立高校が廃止になり、町村立になってから輝く高校の多いことです。道立高校であったときから、もっと様々なチャレンジがなされてもよいのではないのでしょうか。ある意味で、市町村自治体同士で、どうしても中学生の取り合いになってしまうという側面もありますが、レッドカード、イエローカードになって、その協議をするのではなく、配置計画以前の問題として、道立高校とは何か、何のためにあるのか、これからどうあるべきかなどについて、小規模校がその強みや価値を発揮できるような、差別化、独自化がそれぞれできるような協議の場が望ましいと考えます。例えば、高校生や、高校生OBも含む若い世代が参画もする中で、道立高校のこれからの考える今までの通常事務と違う形の協議の場が必要だと思います。具体的に各圏域でそうした新たな協議の場は具体的に進んでいるのか伺うとともに、道教委としてどのように取り組む考えか伺います。</p> <p>6 生涯学習の拠点としての道立高校の可能性について</p> <p>先ほど圏域協議で新しい協議の場が必要だというふうに申し上げましたが、道立高校とは何か、何のためにあるのか、それを地域のなかで考え抜く場をつくることで、私としては、未来の道立高校が、子どもたちのためだけでなく、大人のリスキリングなども含めた生涯学習の拠点としての機能が発見されることを期待します。</p> <p>一つの事例としては、義務教育学校ではありますが、幼稚園からコミュニティスクールが導入されている安平町では、新しい義務教育学校の再建の際に、小学生も参画した会議を重ねて、学校を「世界と出会う場所」と定義をしたそうです。世界とは、いわゆるワールド、海外という意味ではなく、それぞれの牧場や、お菓子屋さんや、子どもたちが、いろんな大人たちの世界に出会う場所という定義をしたそうです。</p> <p>それによって、学校の玄関が今、図書館になり、セキュリティは顔認証でされているそうですが、調理実習室は、クッキングスタジオのように大人にも開放された学校となりました。</p> <p>もう残念ながら廃校になってしまいましたが、道立篠路高校では、学校図書館において、新しく出版された書籍の作家の講演会など、地域に開かれた講座が開催されていました。図書部の学生さんが受付や、展示などに工夫されていてたいへん良い取組だったと記憶をしています。</p> <p>私は、道立高校のこれからの考えるときに、インターネットの活用も含めて、大人も対象とした生涯学習の拠点としての可能性もあるのではないかと、そしてむしろ地域の大人が課題を探究し学び続ける姿を見せることこそが、子どもたちにとっての学びにもつながると考えますが、所見を伺います。</p> <p>(意見)</p> <p>この意見交換を通じて私も改めて気がついたのですが、地学協働は生涯学習の方が担当されているということでもありますし、施設の開放、施設の共有だけではなくて、学習機能を地域社会に提供していくというところで、是非また新たにご検討もしていただければと思います。</p>	<p>(高校配置・制度担当課長)</p> <p>協議の場における若者世代の参画についてでございますが、道内におきましては、各地域における高校の再編整備の検討に当たりまして、例えば、令和4年度に、上川南学区におきまして、地元教育委員会が、富良野高校と富良野緑峰高校の統合に関し、中高生が共に対面で話し合う場を設け、地域から求められる魅力ある高校づくりに向けて議論を深めたところでございます。</p> <p>道教委といたしましては、昨年施行された子ども基本法におきまして、子供の意見を表明する機会の確保が法的に位置付けられたことを踏まえ、先ほど申しあげた事例等も参考にしつつ、今後の高校配置計画の策定プロセスにおける、意見聴取等の方法の在り方について、検討してまいります。</p> <p>(社会教育課長)</p> <p>道立高校の活用についてであります。</p> <p>道教委では、これまで、高校生が地域の関係者と一緒に地域課題に向き合う学びを通して、地域と学校が連携・協働し、人材育成やコミュニティの活性化を図る取組を進めてまいりましたほか、道立学校の施設を地域の方々に開放し、学習やスポーツ、文化活動等、多様な生涯学習機会を提供する施設開放を実施してまいりました。</p> <p>今後も、学校施設を活用した、地域住民、子どもたちが主体的に参画する多様な取組を通じて、道立高校が地域の方々にとって身近な施設となるよう、地域のニーズに応じながら、道民の豊かな学びを育む生涯学習機会の提供に努めてまいります。</p>	<p>高校教育課</p> <p>社会教育課 (高校教育課)</p>

質 疑 ・ 質 問	答 弁	担 当 課
<p>(三) 活力と魅力のある高校づくりについて</p> <p>1 こども基本法を踏まえた新たな高校のミッションづくりについて</p> <p>令和3年3月の中央教育審議会答申を受け、「高校生の学習意欲を喚起し、可能性及び能力を最大限に伸長するための各高等学校の特色化・魅力化」として、各高校の存在意義・社会的役割の明確化、スクール・ミッションの再定義」というのが、その方向性が中教審で示されて、3月に示されてすぐ9月にですね、北海道の各道立学校のスクール・ミッションが再定義されたとのことですが、この再定義のプロセスがどのように行われたのか伺います。また、現在、こども基本法を契機として、総合教育大綱の大きな見直しが行われていると承知をしていますが、私としては、先ほどもちょっと、地域協議ですか、その時にも少しお話しをしましたが、高校生が参画する、本当はその、子どもたちが参画する時って、ミッションの定義とかの方がわりと実は参画しやすいということがあると私は思っているんですが、高校生が参画するスクール・ミッションの再定義こそ、こども基本法の本旨にふさわしく、これからの高校づくりの指針の検討を進めるためにも有意義な取組であると考えますが、見解を伺います。</p> <p>(指摘)</p> <p>ぜひ安平町の事例なども踏まえてですね、ぜひご検討いただければと思っております。</p> <p>2 通信制高校との連携などについて</p> <p>コロナ禍以前から通信制高校を選択をする若い人たちが増加しておりまして、ちょうど2020年になりますが、コロナ禍の直前くらいだったと思いますが、EDU フェスという、教育見本市っていうのがありまして、NPOなども含めた教育関係者の方が一堂に会する場所でした。そこで民間の通信制高校に通う、札幌に住んでいる高校生のお話を聞く機会がありまして、オンラインのコミュニケーションについて、生まれた時からSNSとか、スマホも持っている世代と、私自身の感覚の違いに驚いたところで、この通信制高校が増加する流れというのは、後戻りしないのではないかなと感じたところです。これからの高校づくりを考えるためには、それぞれの道立高校と民間の通信制高校などの連携も視野に入れる必要があるかと考えます。北海道のこれからの高校づくりにおける、道立高校と民間を含めた通信制高校との連携の可能性についてどのように考えるのか見解を伺います。</p> <p>(指摘)</p> <p>全国的に全日制、定時制ともにずっと減少しているのですが、通信制だけは選択をする人が増加し続けているという傾向にあります。私がこの通信制高校との連携を提案するのは、あくまでも地域に道立高校が存在し続けるために、その民間の通信制高校と連携をどうつくるかっていう意味でのお話ですので、この学校外学修の単位認定という制度があるのであればですね、それを道立高校の1つの魅力化として使えるのか使えないのか、そうした検討もぜひしていただきたいと思っておりますし、残念ながら、この高校づくりに関する指針については、通信制に関する情報収集や記載が、余りに薄すぎると思っておりますので、なかなかその拠点が、あちこちなので難しいと思うんですけども、道内に拠点を置いている通信制の高校は10カ所ぐらいあるということで、何らかの拠点を置いているところがあるとネット上では出ておりますので、そうした情報収集も含めてですね、繰り返しになりますけども、あくまでも地域に道立高校が存続し続けるための、通信教育との連携が可能なのかどうかという視点で検討いただきたいなというふうに思います。</p> <p>(四) 道外からの入学者の受け入れについて</p> <p>1 道の見解と支援のあり方について</p> <p>道外からの入学者の受け入れについて、道教委は、従前から産業別の高校以外は、一貫して、厳しい姿勢でありました。一定の</p>	<p>(高校教育課長)</p> <p>スクール・ミッションについてでございますが、道教委では、令和3年度に、各学校の存在意義や目指すべき学校像を明確化するため、学校が立地する自治体や産業界等の関係者と連携し、在籍する生徒の状況や学校の歴史、地域の実情等を踏まえ、再定義を行い、この過程におきまして、生徒の意見を反映するプロセスを設けていたところでございます。</p> <p>今後、スクール・ミッションの見直しを行う場合は、各学校におきまして、多様な意見を踏まえながら検討するとともに、スクール・ミッションの検討案等を生徒や教職員、その他の学校内外の関係者に対して分かりやすく示すことや、生徒自身が、身に付けたい資質・能力を主体的に考える機会を設けるなどして、生徒の意見を教育活動の改善・充実に反映することが重要であると考えております。</p> <p>(高校教育課長)</p> <p>通信制高校との連携についてでございますが、道教委では、私立の通信制高校におきまして学校設定科目として開設されております「eスポーツ」や「医療事務」などにつきましては、多様な学習ニーズを持つ生徒の進路実現に応じた必要性があるものと理解しており、このため、道教委といたしましては、各高校が、他校等での学修成果を自校の科目の履修とみなして単位の修得を認めることができる「学校外学修の単位認定」の制度等を活用することや、生徒一人一人の個性や実情に応じた教育を推進することなどにつきまして、全日制と通信制が連携することは、意義あるものと考えております。</p>	<p>高校教育課</p> <p>高校教育課</p>
<p>(四) 道外からの入学者の受け入れについて</p> <p>1 道の見解と支援のあり方について</p> <p>道外からの入学者の受け入れについて、道教委は、従前から産業別の高校以外は、一貫して、厳しい姿勢でありました。一定の</p>	<p>(学力向上推進課長)</p> <p>道立高校への道外生徒の出願についてでございますが、道教委では、高校を核とした地域創生の取組をより</p>	<p>学力向上推進課 高校教育課</p>

質 疑 ・ 質 問	答 弁	担 当 課
<p>小規模校の場合で、寮や下宿など地域で継続的に支援できる場合は、道外からも受験できるように制限を緩和したところだと承知をしています。</p> <p>今は、道内の30を超える高校が、一般社団法人「地域みらい留学」などのプログラムに参加するなどして、道外募集を行っているところです。残念ながら、道外からの入学者の募集に関しては、それぞれの高校や自治体の自助努力にまかされ、道教委としての積極性が少ないのではないかと感じます。道立高校を核とする持続可能な地域づくりのためには、私としては道外からの受験は歓迎すべきものと考えますが、道の見解を伺うとともに、どのように道外からの受験者を受け入れる道立高校を支援していく考えか伺います。</p> <p>2 入学者の受け入れ枠について</p> <p>現在は、道外からの推薦による入学者の受入数については、入学者の範囲の5%とされており、道内の出願者に影響を与えない範囲で、合格内定者数が推薦標準枠に達するまで受け入れることができるという規定になっています。</p> <p>実際の高校受験の現場では、この方式では、例えば、独自に道外受験枠などをそれぞれの高校で実数で示すことがなかなか難しいために、道外受験生にとっては、リスクが高く、心理的に不安を与えることになり、出願の抑制になるという指摘もでているところです。独自の取組で成果をあげたところほど、そうした傾向になるのではないかと考えます。</p> <p>指針においては、「今後、これまでの出願状況や合格状況等のほか、地域特性や地域からの要望等を踏まえながら、道外からの推薦による入学者の受け入れの拡大について検討します」とありますが、私としては、道外からの受験生の受け入れについて、道教委が数値で、パーセントで受験枠を定めるのではなく、地域やそれぞれの高校の独自の判断を試行的にでも尊重することに待ったなしで、早急に踏み切るべきと考えますが、見解を伺います。</p> <p>(指摘)</p> <p>ぜひ、早急に協議をしていただきたいと思います。冒頭に圏域協議の話もさせていただきましたけれども、本当に地域によって、募集状況も、たくさんの方が来てどうしようかというところもあれば、これから始めて、一人来るかというところで初めてのチャレンジをしているところもありますし、あるいは寄宿生や寮とかもある程度、用意できる地域もあれば、全く用意できない地域もあつたりとかで、全然、地域によって違うので、道が一律で一定の枠を決めることは、もちろん必要かもしれませんが、ある程度、地域単位の合意に基づいて、独自の入試の枠というのを道教委としてしっかり打ち出すということを早急に検討していただきたいということを指摘して質問を終わります</p>	<p>一層進める観点から、道外の生徒を広く受け入れることにより、道外で育った生徒が本道の魅力を深く知り、将来的に本道を支える人材育成につながる効果が期待できるものと認識しております。</p> <p>道教委といたしましては、今後も引き続き、学校の教育活動の特色などをまとめたリーフレットを全国の中学校等に周知するほか、道立高校で学ぶことの魅力や可能性を、よりPRするための方法を含め、さらなる受け入れの拡大について検討し、道外からの出願を受け入れている高校の取組を支援してまいります。</p> <p>(学校教育局長)</p> <p>受け入れの拡大についてであります、「これからの高校づくりに関する指針」(改訂版)におきましては、道外からの入学者の受け入れに関し、これまでの出願状況や合格状況等のほか、地域特性や地域からの要望等を踏まえながら、道外からの推薦による入学者の受け入れの拡大につきまして検討することを示しているところでございます。</p> <p>道教委といたしましては、指針の趣旨を踏まえまして、道外からの入学者の受け入れに関する推薦による入学者の範囲について、校長会や該当の高校の校長等と協議してまいります。</p>	<p>学力向上推進課 高校教育課</p>